

■いわて自然ノート

鳥羽源蔵が採集した植物標本の再評価

専門学芸員 鈴木まほろ (生物部門)

「博物館だより」130号の活動レポートで、2011年3月11日の大津波で陸前高田市立博物館が大きな被害を受け、陸前高田市職員と県内の博物館・文化財関係者が協力して収蔵資料を救出したことを報告しました。救出された押し葉標本の大半は、岩手の博物学者・鳥羽源蔵が明治～昭和初期に採集した大変貴重なものでした。海水と砂泥で汚れた標本の洗浄と復元には、北海道から九州まで全国29ヶ所の博物館等が協力し、約1万5千点のすべてが復元される見込みとなりました。最近では、きれいになった標本が続々と当館へ戻ってきています。

■「アイソシタイプ」の発見

つくば市にある国立科学博物館植物研究部は、標本の洗浄に協力して下さった機関のひとつです。標本を送ってから約1ヶ月後、受け入れ担当の海老原淳さん(国立科学博物館研究員)から朗報がもたらされました。送った標本の中から「ヒメカミザサのアイソシタイプ」を発見した、ということです(写真1)。

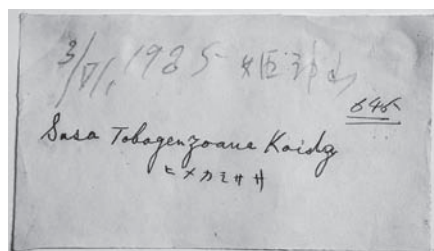


写真1 ヒメカミザサ標本のオリジナルラベル。アイソシタイプ発見の決め手となった。

「アイソシタイプ」とは聞き慣れない言葉ですが、一体何のことでしょうか。分類学者は、これまでに誰も名前をつけていない種、すなわち新種を発見すると、新しい学名をつけて既知の種との違いを説明する学術論文を発表します。これを「記載論文」と呼びます。記載論文を書く時には、発見した新たな種の証拠として「ホロタイプ」標本を1点選び、その

標本の採集地・採集年月日・採集者名と採集者番号を書くよう定められています。ところが昔の記載論文では、ホロタイプが明示されず複数の異なる採集地・採集年月日の標本を引用している場合があります。これらは「シタイプ」と呼ばれます。

標本を作る人はたいてい同時に複数のサンプルを採集し、複数の標本を作ります。これを重複標本といいますが、ホロタイプの重複標本は特に「アイソタイプ」、シタイプのそれは「アイソシタイプ」と呼ばれ、ホロタイプやシタイプの次に重要な標本とみなされます。

ヒメカミザサは、京都帝国大学の植物分類学者・小泉源一が、鳥羽源蔵が盛岡市の姫神山で採集した標本などをもとに、1936年に記載した種です(現在は変種)。小泉は複数の標本を引用したので、タイプ標本はシタイプとなっています。発見されたのはその重複標本、すなわちアイソシタイプだったのです。

鳥羽源蔵は自らが採集した珍しい植物の標本を、牧野富太郎や小泉源一・本田正次など当代一流の分類学者に送り同定を依頼しました。それらが新種として記載されたことも一度ならずあり、ホロタイプとなった鳥羽源蔵の標本は今でも東大・京大や国立科学博物館などの標本庫に大切に保管されています。一方、鳥羽源蔵が手元に残した重複標本は陸前高田市立博物館に収蔵されましたが、その中にアイソタイプやアイソシタイプなどの重要な標本が含まれていることは、これまで気付かれていませんでした。

■鳥羽源蔵について

ここで鳥羽源蔵という人物について少し詳しく御紹介しましょう(写真2)。

鳥羽源蔵(1872～1946)は、陸前高田市小友の大きな農家の長男として生ま



写真2 岩手県師範学校教諭時代の鳥羽源蔵『岩手博物界の太陽』(1994)より

れました。尋常小学校卒業後、16歳頃まで断続的に学校に通い、その後もさまざまな分野の学者に師事して自ら学んだと言われています。特に考古学や生物学に関心が強く、生物学では昆虫・貝類・植物・海藻・地衣類・菌類など、ありとあらゆる分野について学んだようです。昆虫学では松村松年、植物分類学では牧野富太郎など、高名な学者たちに教えを乞いながら、多くの標本と著作を残しました。

若い頃は小友尋常高等小学校に訓導(今の教諭)として勤めていましたが、36歳の時に台湾総督府農事試験場へ招かれ、技手として4年間働きました。また50歳からはその業績を認められ岩手県師範学校(現在の岩手大学)の教諭心得(のちに教諭)として学生に博物学を講義し、73歳まで勤めました。

■鳥羽源蔵コレクションを調べる

ヒメカミザサのアイソシタイプ発見の報を受けて、他にもこうした重要な標本が見つかるだろうと考え、少し調べてみることにしました。

鳥羽源蔵は、昭和初期に発行されてい

た同好会誌『岩手植物研究』などに報文を寄せ、自らが採集した標本を基に新種が記載されたことや、珍しい植物の発見があったことを紹介しています。基になっているのは牧野富太郎や小泉源一・本田正次らが書いた英語やラテン語の論文です。

これらの報文や論文を手がかりにしながら、重要な発見につながった標本の重複標本を探してみました。これまでに見つかった中からいくつかを紹介します。

まずは「ハゴロモアオナラ」のアイソシタイプと思われる標本(写真3)。岩手町沼宮内で1931年10月2日に採集されました。コナラの突然変異個体と思われるもので、葉が羽状に深く切れ込む変わった形をしています。小泉源一がコナラの変種として記載しました(現在では品種)。

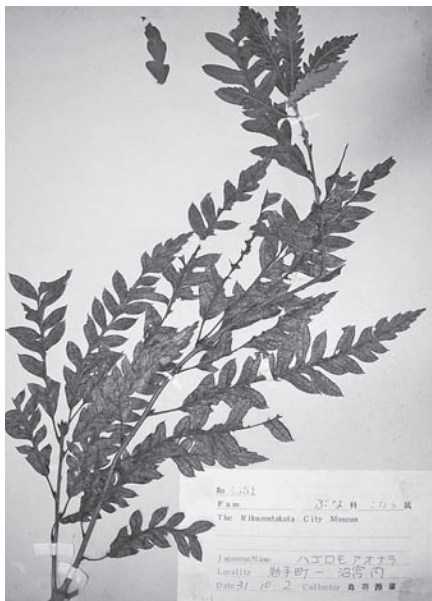


写真3 ハゴロモアオナラのアイソシタイプと思われる標本

また、タイプ標本ではありませんが、日本で最初に採集されたシソ科ルリハツカの標本として本田正次(1947)が報告した標本の重複標本が見つかりました。1938年9月26日に上閉伊郡栗橋村道々河原(現・釜石市橋野町)で採集さ

れたものです。なお、この標本の採集者は鳥羽源蔵ではなく、教え子の小水内長太郎であったことが後に判明しています。

■生物相の変遷を示す標本

タイプだけが貴重な標本というわけではありません。生物標本には、過去の環境や生物相を知るための証拠としての価値もあります。その意味で最も重要なのは、鳥羽源蔵が1890年代から1920年代までに三陸沿岸地方で採集した標本です。この時代にこの地域で採られた植物標本は、鳥羽源蔵の採集品以外にはほとんどありません。いわばオンリーワンの存在なのです。

陸前高田市の高田松原は、今回の大地震と津波で壊滅してしまいましたが、過去にもたびたび津波に遭ってきました。鳥羽源蔵が高田松原で1902年に採ったラン科クモキリソウの標本(写真4)は、過去の高田松原の様子を伝えるきわめて貴重な証拠なのです。

生物標本を「生物相や環境の変遷を知るための手がかり」と考えると、鳥羽源蔵が採集したものだけでなく、その後の陸前高田の人々が継続的に採集してきた現代までの標本、これから採集されるであろう標本にも、重要な意味があると言えます。

もうひとつ、歴史的な価値にも触れておきましょう。鳥羽源蔵は岩手山や早池峰山等でも早くから採集を行っていました。鳥羽源蔵が早池峰山で最初に標本を採集したのは1903年で、牧野富太郎・加藤子爵らの調査に先駆けること2年、早池峰山で行われた植物調査としては須川長之助とフォーリーに次ぐ早さであろうと考えられています。つまり学史的な価値のある標本とすることができます。

■鳥羽源蔵コレクションの再評価

残念ながら、地方の小さな博物館にある標本が分類学の専門家の目にふれる機会は、あまり多くありません。陸前高田市立博物館の鳥羽源蔵コレクションも、その真価が広く知られているとは言い難く、分類学的な研究は不十分でした。今回の「標本レスキュー」をきっかけにたまたま外に出ることになったために、再評価につながったと言えるでしょう。

鳥羽源蔵コレクションを初めとする陸前高田市立博物館所蔵標本の全容把握とその再評価は、まだ緒についたばかりです。今後も多くの専門家の御協力を得て研究を進め、成果を広く公開していきたいと考えています。そして陸前高田市に博物館が再建され、貴重な標本をお返しできる日が1日も早く来ることを祈っています。

引用文献：『岩手博物界の太陽 鳥羽源蔵先生を偲んで』鳥羽源蔵先生の胸像を建てる会(1994)



写真4 1902年に高田松原で採集されたクモキリソウ標本